

共同研究プロジェクト「「もの」の人類学的研究—もの、身体、環境のダイナミクス」
2009年度第3回研究会

日時：2009年7月18日（土）午後1時半から午後6時30分

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所マルチメディア会議室（304室）

発表者・発表題目：

- 1) 大村敬一（大阪大学）「「もの」への「重ね合わせ」による三者関係：イヌイトの生業にみる共食と協働と共感と言語の起源」
- 2) 執筆予定者全員「成果論文集に向けた第一回企画打ち合わせ」

[発表要旨]

「もの」への「重ね合わせ」による三者関係：
イヌイトの生業にみる共食と協働と共感と言語の起源

大村敬一（大阪大学）

生態心理学での「アフォーダンス」という考え方は「食べもの」について次のような問いを喚起する。すなわち、人間にとって「人間は食べられるもの」、つまり「食べることを人間にアフォードする」が、その人間が「人間にとっての食べもの（常食）」にならないのは何故なのかという問いである。

この問いは一見すると奇怪な問いであるが、人間の社会性を発動する近親相姦禁忌の問題と同型の問いであり、その意味で人類の社会性の条件を考えるための重要な試金石になる。

隣にいる人間と自分がともに相互に「食べられるもの」であるにもかかわらず、「食べもの」ではないとすることによって、「食べもの」を外部から調達する必要が生じる。しかし、それでも、隣にいる人間と自分は依然としてともに相互に「食べられるもの」であり、生態学的には相互が相互に対して「食べることをアフォードしている」状態にあるため、この状態を隠蔽するためには、「食べもの」とは何かを規定する「食べもの」の表象が隣の人間と自分で共有され、「食べものは外部から調達するものであって、隣の人間は食べものではない」ということが、隣にいる人間と自分の間で共有されていなければならない。「共食」という行為はこの「食べもの」の表象の共有を確認する有効な手段になる。自分たちはともに「食べる主体」であって、決して「食べられる客体」にはならないということを「共食」を通して確認することができるからである。さらに、その「共食」は、「共食」する者同士の間とともに「食べる主体」として相互に協働し合う関係を発動する。

もちろん、この「食べもの」の「共食」によって発動する社会性は、「食べものの与え手」が「食べものの受け手」には決してならないという意味で、近親相姦禁忌のような外部の集団との互酬的な相互性を生み出すことはなく、外部の集団との関係は常に一方的な関係でありつづけるため、近親相姦禁忌とは異なっている。しかし、この「食べもの」をめぐる禁忌は、「共食する者たち」と「食べものと供給する者たち」という分割を生み出し、「食べものの与え手」に対して劣位に位置する「共食する者たち」という秩序を生み出す。この意味で、「食べもの」という表象の共有と、その共有を確認するための手段である「共食」は、人類が集団を生成しつつ宇宙を秩序づけてゆくための一つの鍵になるのではないだろうか。

この発表では、カナダ極北圏の狩猟・採集民であるカナダ・イヌイトの生業、とくに、その生業を根底的に規定している規範、「野生生物がイヌイトに与える食べものをイヌイトが分かち合う場合に限って、野生生物が自らすすんでイヌイトに食べものを与える」という奇妙な規範を検討することで、この問題について考えた。そして、「共食」という行為を通して野生生物に「食べもの」という表象を重ね合わせることでイヌイトの間に共感と協働が生じている可能性、そして、その「食べもの」という表象の共有を共食を通して確認し合う行為の中に言語の起源の可能性をさぐった。